【小説部門・大谷文芸賞】

ホワイトサマー

私立筑紫女学園高等学校　第２学年　木村茉緒

あれは、とても熱くてとても眩しい、そんな夏の日のことだった。

門司の夏は、暑い。ぼくのこの小さい身体と比べてあまりにも広すぎる門司の街には、太陽の光が遠慮なんてものも知らずに降り注ぐ。コンクリートで固められた地面を、いや、そのずっと下で生きているミミズの子供たちさえも焼き殺してしまいそうなほどに強く照りつける太陽の光は、ぼくが触れれば火傷してしまいそうなくらい熱そうだ。じりじりと音を立てて空気を刺激するその熱は、ぼくの喉までも焼き尽くしてしまいそうで、ぼくは空気をたくさん吸ってしまわないように息を止めたり、とてもゆっくり、小さく、息を吐いたりした。もしかしたら喉が焼き尽くされてしまってもう声が出ないのかもしれない、そんな気持ちで控えめに「あ」と声を出してみたり、顎の先から鎖骨まで人差し指でつーっと一直線になぞってみたりもした。そうするたびに「だいじょうぶだ、ぼくの喉はまだ元気だ」と、確認もした。

踏切を渡って、門司港まで歩く。たくさんの大きくてかっこいい船たちが行ったり来たりする門司の海は、真っ白な太陽の光を反射して、きらきらと輝いている。昔おじいちゃんと一緒にクレヨンで描いた、ぼくたちの絵の片隅にいる太陽は真っ赤な色をしていたのに、今ぼくの目に映るその光は、ぼくの道具箱には入っていなかった白色だ。あの時のぼくは赤い太陽がいちばん熱いと思っていたけれど、そんな赤色を追い越すほどに熱い色が存在するんだと、それが白色なんだと、ぼくはこの夏で思い知った。

たくさんの人やものが行き交う門司港一帯は、夏になれば人の熱気で溢れかえる。汗だくになりながら船に荷物を積み込む男の人たちや、暑いなか、分厚い着物を着て涼しげな笑顔で歩く芸妓さんたち。それに、地元の人たちだけではなくて、旅行にやってきた外国の人たちも。彼らは、それぞれの方法でどうにかしてこの暑さから逃れようとしている。こうして港の様子を見ていると、この世界はぼくの周りにある、ぼくが普段見ているものだけで出来ているわけじゃないんだと思い知らされる。地球の裏側では戦争という争いがが起こっていて、この街にも悪い人たちがやってくるかもしれない、そういう時は、寛太が門司のみんなを守ってやれ。おじいちゃんがそう教えてくれた。それでも、この賑やかな門司港を見渡せば、怖い顔や悲しい顔をしている人はひとりもいなくて、隣の国、清では戦争が起きている、なんてことはぼくには到底理解のできることではなかった。それに港でおじさんたちが売っているような戦争の絵を見ると、ぼくよりもずっと力の強そうな男の人たちが悪い敵をやっつけている、そんなかっこいい風景ばかりが並んでいて、この人たちみたいに門司のみんなを守らなきゃと。ぼくはそれに少しの憧れを持っていた。ぼ

くにはその絵を買えるほどのお金はないけれど、その絵の前を通りかかるたびに、それをじーっと見つめて、忘れないように目の中に閉じ込めた。ぼくもいつかあんなふうになるんだって。

鳥の羽のようなものがついた大きな帽子に、裾が地面についてしまいそうなほどに丈の長いドレス、そしてコウモリ傘。カクカクとしてとても頑丈そうな黒い帽子に、膝まである長さの背広、首元にある変な形をした襟締。少し前には門司駅が建てられて、ますます発展していくこの街には、イギリスという国やその周りの国からたくさんのお客さんが来る。この国の人たちも綺麗な装いをしていて、ぼくの周りは楽しそうな人達で溢れている。いつしかぼくは、港に泊まる船の近くまで行って、そこから降りてくるたくさんの人たちを観察するのが好きになった。ぼくの知らないものを見ることができるから。ぼくの見ている世界が広がる気がするから。ぼくのなかにいろいろな感覚が増えていくような気がするから。

港にたくさん並んだ船たちの横を歩いていると、ぼくの体よりもずーっと大きな船の真下にできた真っ暗な影に、人らしき姿があった。その体は襟付きの白いシャツと茶色の半ズボンという洋式の服を纏い、ぼくと同じくらいの体の大きさで、日本への旅行途中に家族とはぐれてしまった外国の少年のように見えた。ぎゅっと小さくまるまったその背中は地面にはりつけられたように少しも動く気配がない。困った人がいれば声をかけなさいとおじいちゃんに教えてもらっていたけれど、英語の話し方を教えてもらったことはなかった。ぼくは漢字を読むことができても、困った人を助けることは出来ないのかもしれないと少し落ち込んだ。それでもなにか声をかけなければ、この迷子はこの場所から動くことなく、この暑さに耐えることもできずに地面へと溶けだして海へと流れて行ってしまう、そんな気がして、ぼくには声をかけるという選択肢しかなかった。

「ハロー」

ぼくが知っている英語はこれしかない。間違えていたらどうしようと不安になりながらも、声をかけないよりはいいだろうと思って、小さい声でささやいた。やさしく、ゆっくりと。柔らかく、それでいてこの緊張感に見合うほどの重さを持ったぼくの声が、その小さな背中の上を滑っていく。ぼくたちの間に一瞬の沈黙が流れて、その少年は恐る恐るこちらを振り返った。ぼくは手に持っていた本をぎゅっと掴み直して、唾を飲み込んだ。彼は細い腕に抱えた大きなスケッチブックを握りしめ、少しだけ背中を伸ばした。その小さな体を自ら抱くようにぎゅっと丸まったからだはそのままに、首だけを動かしてこちらを向いた彼の姿に、なぜだかぼくはこの場所から逃げ出したくなった。彼は目を迷わせながら僕のつま先から頭の先までをゆっくりと見る。その姿はまるで、ぼくに怯えているみたいで、ぼくは声をかけようと決めた少し前の自分を疑ってしまいそうだった。しゃがんだままこちらに体を向け、ゆっくりと立ち上がるその姿は、少しの強さを持っているみたいで、ぼくの心臓はドクンと一度だけ鳴って、すっかり忘れていた夏の暑さに喉の奥が焼け

てしまいそうだった。しゃがんでいたから小さく見えたけれど、立ち上がるとぼくよりも少し高い身長に、ぼくは少し負けたような気持ちになった。

　声をかけたのはいいけれど、だからといって何かをしようとは考えていなくて、ぼくはなんとなくその手を掴んで歩き出した。たくさんの船で混んでいる港の、奥の、奥の方へ。
　どれだけ歩いただろう。ここから見える向こう岸の様子は、いつも見ている景色と変わらないように見えるのに、気づけば僕たちの周りからは、騒がしい街の音が消えていた。ぼくは賑やかな港にしか興味がなかったから、こんなに静かなところに来るのは久しぶりだった。芸妓さんたちの香水の匂いを忘れさせるほどの海の香りを感じたのも、久しぶりだった。海の気泡をひとつひとつ割っていくみたいに、防波堤の上を一歩一歩ゆっくり歩いていく。しばらく歩き続けていると、グッと、後ろから腕を引かれた。歩くことに集中してしまって、ぼくは彼の手を引いていたことを忘れてしまっていた。少し申し訳なくて、ぼくは途端にその手を離した。その手元を見ると、手首にはうっすらと赤い跡がついていた。心配になってぼくがそこから目を離せずにいると、彼は片手でスケッチブックを抱えたまま、もう一方の手を背中のうしろに隠してしまった。ぼくの目は行き場を失ってしまって、ぼくは自然と視線を上げた。初めてしっかりと見た彼の瞳は真っ黒だった。頬は痩せたように細いけれど、暑いからだろう、その上にはやさしい赤色がのせられていて、唇はぼくよりも厚く、乾燥したように割れていた。服には泥のような汚れが少し付いていて、体に見合わない、少し窮屈そうな小ささだった。身なりからすると、彼は旅行に来る他の外国の人たちとは違うようで、貨物船にでも紛れ込んで門司まで来てしまった迷子のようだった。けれど、そんなことはぼくにとってどうでもよかった。意味もなくそうしなければいけない気がして、ぼくは腕を大きく広げ、目一杯息を吸った。この海と、この夏の香りをぼくの中に閉じ込めるみたいに。ぼくのこと、ちゃんと見てる？　ぼくはこうやって思い出を心に記録していくんだ。
　太陽が照りつけるなか長く歩いたせいで少し重くなった体を投げ出すように、そのまま防波堤に座る。港だけじゃなくてここに遊びに来るのもいいな、そんなことを考えながら海を見ていると、隣に立っていたはずの影がゆっくりと座った。ぼくはなんだか嬉しくて少し距離を置いて隣に置かれた手にぼくの手を重ねて、彼の様子を伺った。驚いたように少し体を震わせたけれど、そのまま海を見つめるその横顔は、とても綺麗だった。鼻が高く整った顔をじっと見つめていると、ぼくの目には、目の前の海がぼくたちの周りまで広がっているように見えた。白い肌に深い青が透けるような、そんな風景は、ぼくがいつも見ている港の風景とは、別世界のように思えた。海の色を透かしたように透明ではあるけれど、決して青白いと言うわけではない、そんなはっきりしているようで曖昧な色。ぼくは目の前にある海に触れたくて、彼の頬を手の甲でなぞった。少しくすぐったそうに笑ったその顔は、ぼくの心にスッと溶けていった。彼の頬は、あたたかかった。ぼくは彼のことを知りたくなってしまって、でも、先にぼくのことを教えるのが礼儀かなとも思ったり

して、彼の頬に触れたまま、ぼくは
「貫太」
　と一言だけ言った。突拍子もないその言葉に、彼はよくわかっていない様子で、じっとぼくの目を見つめる。ぼくは、自分を指差しては「か、ん、た」と大きく口を動かした。彼は、ぼくを指差して
「かんた」
　と囁いた。ぼくが彼を指差すと彼は、
「ノア」
　と囁いた。ぼくは自分を指差し、目一杯に手のひらを広げて「じゅう」の指を作った。ノアは僕の左手をとって親指を曲げ、「きゅう」の指を作った。そうか、きみはぼくより年下だったんだ。ぼくは驚いた顔をして見せた。他の人にとってはなんてことない会話だけれど、ぼくたちにとっては、これが二度と経験することの出来ない、始まりだった。なぜだか心がくすぐったくて、ぼくたちは目を見合わせて静かに笑った。目を細めて肩をすくめ、歯を見せて笑う彼の顔を、僕はずっと見ていたいと思った。

　日が沈む時刻が近づいてきたのだろう、オレンジがかった空が視界いっぱいに広がる。ぼくはずっとこうしていたいと思っていた。だけど、ぼくたちは金平糖一粒さえも持ち合わせていなかったから、空腹をどうにかするためには港の方に帰るしかなかった。硬いはずの防波堤に体が沈みこんでしまうような感覚を覚える。ぼくは、その心地良さに動く意思を失ってしまいそうな体を無理やり起こし、すぐに振り返る。ノアは長旅の疲れで眠ってしまったようだった。夏の暑さのせいで汗をかいて顔に張りついた前髪を、人差し指で分ける。口を少し開けてすうすうと気持ちよさそうに眠る姿には、その整った顔立ちに見合わない無防備さと幼さが見えた。
　港を通り過ぎて駅まで歩くと、夕方であってもそこは人で混雑していた。昼間よりも少し涼しくなって体の熱が落ち着いたからか、それとも別の理由からか、ぼくたちはぎゅっと手を繋いで歩き続けていても不快に感じることはなかった。長く歩いて辿り着いた門司駅の前には、ぼくたちと同じくらいの歳の子供たちが人混みを作っている。彼らは、いつものように戦争絵を買おうと常吉のおじさんのところへ集まっていた。あそこにいる子供たちはみんなあの戦争絵を買うことができるけれど、ぼくは買うことができない。だから、彼らが親の元へ帰るまで待って、それから常吉おじさんが屋台を片付ける頃に絵を見せてもらうのが習慣になっていた。
「おー貫太。今日も来たんか。ようそんなに通いきるなあ。貫太がいっちゃんようきてくれておいちゃん嬉しいわ。ほら、今日も貫太の好きな絵、見しちゃるよ。お、その貫太の後ろに隠れとるのはどうしたん？　見てん。おいちゃんのことえらい怖い人やと思っとるわ。いっちょん顔見せてくれん。なして連れてきたん？」
「船に迷い込んでここまで来ちゃったみたいなんです」

「あらー、そりゃ大変やったなあ。でもその子、えらい貫太のこと好いとるんやない。いっちょん離れんで貫太によっかかったままやん。ええ友達できてよかったなあ貫太。自分のこと好いてくれる友達は大きくなっても大事にせんと。ほら、ぼくも見るかい。」
　常吉おじさんが戦争絵を差し出すと、ノアはそれを恐る恐る手にとり、ひゅっと小さく息を吸い込んだ。ぼくたちの間に分厚い無言の空間が生まれる。ノアは眉を八の字に寄せて、その絵を投げ捨てた。それは、憎らしいほどゆっくりと、ひらひら地面に落ちていく。下を向いた顔をのぞき込むと、ほんの一瞬だけぼくのと合わせられたノアの瞳は揺れていて、彼は一歩後ずさりしたかと思えば、港の方向へ走り出してしまった。
「どうしたんや！　ほら寛太、これ持ってってやり！」
　何が起きたかわからず正常に働いていないぼくの頭の中に常吉おじさんの声が響く。ノアの後に着いて走り出そうとするぼくに、常吉おじさんはいつも通りおやつをくれた。常吉おじさんがくれたのは、いつもの煎餅一枚でなく、煎餅二枚とカラフルな金平糖だった。

　再び戻った港はもう暗くなっていて、星さえも見えない真っ黒な夜だった。さっきまで走っていたはずのぼくたちはいつしか疲れ果ててしまって、ゆっくりとした足取りになっていた。ぼくたちはお互いの間に一定の距離を保って歩いていて、どちらが先に距離を縮めるか、そんなゲームをしているようだった。
　ノアが大きな船の前で立ち止まる。乗り込み口にタラップが設置されたままのその船はとても大きく綺麗で、外国からの旅行客を乗せるための船のようだった。立ち止まったノアを追い抜いて、船の中まで進んでいく。ノアは船に足を踏み入れるのを躊躇っているようにゆっくりとぼくの後ろに続く。ぼくはノアを振り返り、手を差し出す。ぼくはきみを傷つけないし、きみ以外の人も傷つけることはない、昇っておいで、一緒に星でも見よう、朝になったらおとなに見つかるかもしれないし、怒られるかもしれない、けれど、そんなことはぼくたちにとってはどうでもいいことじゃないか、いっそのこと、一緒に怒られようよ。ぼくは今夜、きみと一緒にいたいんだけど、きみはどう？　周りには誰もいない静かな夜、ぼくたちの間には音が存在していなかったけれど、ノアがぼくの言葉を理解できるはずはなかったけれど、確かにぼくはノアにそう語りかけた。ぼくの手に触れたその温度は一瞬でぼくの中に染み込んでいった。ノアはもうぼくと一緒にいてくれないのかもしれない、心の隅で感じていた不安がノアの手のひらで安堵へと塗り替えられていく。ぼくはその手を引いて船の奥と進んでいく。一度も後ろを振り返ることなんてせずに。
　貨物室に詰め込まれた荷物を端から端まですべて開いていく。一つ、また一つと荷物を物色していくたびにぼくたちの中には、高揚感が積もっていった。ぼくたち、共犯だね。いけないことだとはわかっていても、二人で危ないことをするのはぼくたちが同じ色に染まっていくような感覚で、その感覚はぼくの心にあるスイッチを一つずつ丁寧に押していった。ノアと一緒にいると、自分が知らないぼくを、ぼくの中から連れ出して、ぼくの知らない世界に行くことができるみたいだ。ぼくは小さな鞄から蝋燭とマッチを、ノアは大

きなトランクから錫の容器に入った絵の具と筆を持って、甲板の方へと向かった。
　蝋燭に火を灯して本を開く。鴎外の『水沫集』、ぼくの大好きな本だ。おじいちゃんに本の読み方を教えてもらってから、ぼくは「うたかたの記」を何度も読んだ。本を読んでいるとぼくは、ぼくの知らない世界に連れていかれるような、そんな感覚を覚える。ぼくにとっての本は、どこかノアに似ているみたいだ。ぼくの隣に座ってまっすぐとスケッチブックを見つめる彼の輪郭を目で追う。ポケットに入っていてバラバラに割れてしまった煎餅や金平糖を食べながら、ぼくは本を読んで、ノアは絵を描いた。
　ぼくの意志とは裏腹に落ちてくる瞼を無理やり開ける。眠ってしまわないように本を閉じては開いてを繰り返すぼくと比べて、ノアは変わらずスケッチブックを見つめていた。その手元は暗くてよく見えない。火をつけた蝋燭を近づけて、その絵に目を向ける。スケッチブックには、真っ黒な空に白い星が散りばめられていた。そこから目線を頭上に移すと、なぜだろう、真っ黒だったはずの空には真っ白な星が輝いていた。黒と白。ただそれだけの絵は、黒い背景に真っ白な光が浮かび上がってくるみたいで、綺麗だ。ぼくはそれを逃がさないように、目の中に留めておきたかった。彼の手によって作り出された星がどこか少し羨ましくて、それをずっと見つめていると、彼は白い絵の具がついたままの筆でぼくの頬をなぞった。何を描いたのかは見えないけれど、満足そうな笑顔でまっすぐぼくの目を見つめるその瞳には、星が溢れてしまいそうな夜空が映されている。彼の手を取り、ぼくの頬の上を、ぼくと彼の手でなぞると、なぞった部分から温かさが広がっていった。真っ白な星が描かれたぼくの頬が温かかったのか、彼の真っ白な手のひらが温かかったのか、それとも両方なのか、それは分からなかった。

　門司港は今、暑い夏。今日もぼくは賑やかな港の音で目を覚ます。ぼくはひとりで船の甲板にいて、何かとても長い夢を見た感覚がした。僕の足元には白い金平糖二粒が転がっていて、ぼくの頬はひどく乾燥していた。